

23/11月学習会の案内 第57回「資本論を読む会」

DAS KAPITAL

日時 11月27日（月曜日）午後6時30分 Zoomで開催



今回は、いよいよ「第23章 資本主義的蓄積の一般的法則」の「第1節 資本組成の不変なばあいにおける蓄積に伴う労働力需要の増加」[岩波文庫(三)p178-p193]。

10月の「資本論を読む会」には11人が集まりました。今回は「剰余価値の資本への転化」のシメになります。まずは第4節「資本と収入への剰余価値の分配比率から独立して蓄積の大きさを決定する諸事情」。つまり剰余価値を大きくするための主要な要素は①労働力の搾取度②労働の生産力の増大③労働手段の無償奉仕④生産規模の拡張の4点。マルクス特有の?難解な表現を削ってしまえばナルホドと分かる話です。それと、今回は大変な発見がありました（Takちゃん指摘）。この節で書かれている“1795年のスピーナムランドの労働賃金”（貧困救済制度p160-161）が「多年にわたって、彼らを墮落させた」とマルクスは指摘しているのですが、これが現代ではベーシックインカム失敗例として引用されているようです。マルクス主義者がベーシックインカムに消極的なのは、このためだとの指摘もあります。

第5節は「労働基金」。可変資本の労働総賃金にあたるものを表現しています。この取りあいは資本の剰余価値に影響しますね。資本家はもちろん少ない方がよいのですから…。

今回も終了後の懇親会は楽しく過ごしましたが、支局のWeb読者会（年寄りには参加を控えた方がよいのかな?とか議論）、イスラエルとガザの戦争、札幌オリパラ問題、JP・クロネコ・運輸労働力不足問題等の意見交換。余り白熱議論にはしなかったと思います。新規参加歓迎しますよ!

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.cocacn.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから- Katoちゃん

第4節 資本と収入とへの剰余価値の分配比率から～

剰余価値が資本（投資）と収入（消費）に分かれるかは、剰余価値の大きさによって決まる。

剰余価値率を上げる4つの事情を再確認する。

1. 労働力の搾取度

労働賃金は、労働力の価値として支払われると仮定したが、実際には、この価値以下への引下げが重要な役割を演じているとして事例で説明する。

2. 労働の生産力の増大

労働の生産力が増えれば、生産物量が増加し、剰余価値は増え、資本家は、資本と消費の割合を変えず、さらに商品の低廉化が資本家により享楽手段を提供する。一方、生産の増大による賃金の上昇があったとしても、剰余価値以上の上昇はありえないので労働者の低廉化となり、剰余価値率が増大する。

3. 労働手段の無償奉仕

建物、機械装置、排水管、労働家畜、各種の装置のように長短期間にわたり、生産過程で利用効果を上げる労働手段は、暫時的に摩耗するだけでその価値の一部分しか失わない。これらは、生産物形成者として使用されるが部分的にしか消費されなければ、自然力と同じ無償奉仕を行うようになる。

4. 生産規模の拡張

資本が継続的に蓄積によって増大し、前貸し資本の量とともに生産が拡大すればするほど、生産のすべてのバネ。がより精力的に働くのである

第5節 いわゆる労働基金

資本は固定した量ではなく、社会的富の弾力性のある一部分で、剰余価値の消費と追加資本の分割によりたえず変動する。さらに、現に機能している資本の量は、これに合体される労働力、科学、土地により、資本の弾力的な要素となるとわかった。しかし、古典派経済学は、社会的資本の労働賃金の総量は固定している（労働基金）と考え、資本に都合の良い定説を確立させた。マルクスは、この定説を批判した。